譯詩集

芥川龍之介が
よき靈に捧ぐ

濁世何曾頃刻光

人間眞壽有文章

薄少君悼夫句

序
文

ささやかなものは佚せられやすい。しかし眞實、聰明な魂を有つてゐる人たちはその佚せられやすいささやかなもののみに感じられる美しさを喜ぶ。瞬時に消えてゆく虹を見落さぬ時に蒼弩の深碧は愈〻莊麗にわれわれの感情を裝飾し、草の穗をわたる風片若し微かに鳴るとすれば、時として悲笳にまさりて鄕愁を呼ぶことなしとしない。

萬葉人の古より支那詩文の新聲はわが詩歌の香料となり、薫郁時を經てなほ新らしく、折々のすがたにふさはしい裝の魅力を用意して來た。そしてわれわれは幾度か漢魏の名に班固、曹植の賦を記し、唐時の名に李杜元白の詩を誦することを教へられずにはゐなかつた。蒼茫たる支那文學の場中、もとよりかゝる名は鬼工制するところの畫閣綺樓であつて基底巉岩に立ち屋頂飛鳥を指し

てなほ低しとする大建築である。その樓閣の鎖鑰（さやく）を排し或は彩壁の畫圖に恍然として心を奪はれ或は階級の幽を穿つて摩天の高より七星の近きを望み眼眩して足危きを覺ゆることは快絶の極であらう。白日の雄麗と灝氣（かうき）の明朗とを拒（こば）んで容れざるものが世にあらうとは思はれない。

しかしさういふ樓閣を外にして、もし靜かな水のほとり、忘れられたやうに立つ一院の亞字欄に色うすき衣の風にはためくを見たとしたならば、おほかたは花散りたる小庭に臨んで黄昏の光におぼろめける白い鸚鵡ただ一羽、軒に茶を喚ぶを聞いたとしたならば、かゝるさゝやかな居宅の前もこれまた心なくしてむげに過ぎ去るに忍びない。佇立（ちょりつ）之を久しくすればやがて自ら立ち寄りて

奥野信太郎

車塵集

美人香骨
化作車塵

「楚小志」

ただ若き日を惜め

勸君莫惜金縷衣
勸君須惜少年時
花開堪折直須折
莫待無花空折枝

杜秋娘

綾にしき何をか惜しむ
惜しめただ君若き日を
いざや折れ花よかりせば
さをらはば折りて花なし

春ぞなか／＼に悲しき

滿眼春光色色新
花紅柳緑總關情
欲將欝結心頭事
付與黄鸝叫幾聲

朱淑眞

はゞゆき春のなゝなかに
花もやなぎもなやましや
ぞすぼほれたるわが胸を
啼けうぐひすよ　幾聲に

音に啼く鳥

檻草結同心
將以遺知音
春愁正斷絶
春鳥復哀吟

薛　濤

ま垣の草をゆひ結び
ふさけ知る人にぞ逢るべせむ
春ぞ来うれひのきはまりて
春の鳥こそ音にも啼ぞ

春のをとめ

風花日將老
佳期尚渺渺
不結同心人
空結同心草

薛　濤

志づ心なく散る花に
ふげきぞ長きわが袂
情をつくす君をなみ
ほむや愁のつくづくし

薔薇をつめば

陽春二三月
草與水同色
攀條摘香花
言是歡氣息

孟　珠

わさらぎ彌生春のさかり
草と水やの色はみどり
枝をたわめて薔薇をつめば
うれしき人が息の香ぞもる

謡

楊柳楊柳
裊裊随風急
西樓美人春夢中
翠簾斜捲千條入

夷陵女子

やなぎや柳
なよなよと風になびきてゑどけなし
色香も深き窻のひと春の夢いまうつつなし
れだれ捲くれてれぞき入る千條（ちすじ）のやなぎ

よき人が笛の音きこゆ

欄干閑倚日偏長
短笛無情苦斷腸
安得身輕如燕子
隨風容易到君傍

黄氏女

おばしまのわがほれづれに
憂き笛ぞいよよ切なき
ふぞわが身つばくらならぬ
風に乗て君がり行かぬ

女ごゝろ

宿昔不梳頭
絲髪被兩肩
腕伸郎膝上
何處不可憐

子夜

むかし思へばおどろ髪
油もつけず梳(す)きもせず
一たび君に凭(よ)り伏して
わが身いとしやここかしゝ

ほほ笑みてひとり口すさめる

覽鏡獨無語
凝眸意似痴
遙遙無住着
若箇是相思

呂楚卿

鏡とりでてうつとゑゑ
うつけ心のまなざしや
見入るもとほきうはのそら
戀ぞうれゑきかくもこそ

むつごと

紅（べに）おしろいのにほふのみ
色も香もなきわれながら
願ひ見すてぬ神ありて
わが身を君に逢はせつはふ

芳是香所爲
冶容不敢當
天不奪人願
故使儂見郎

子夜

怨ごと

豈曰道路長
君懐自阻止
妾心亦車輪
日日萬餘里
景翩翩

通ひ路いかで遠からむ
みこゝろゆゑぞ通はざる
をが思ひこそめぐる輪の
日日に千里（ちさと）をたどれる伎

蝶を咏める

薄翅凝香粉
新衣染媚黄
風流誰得似
兩兩宿花房

賈蓬萊

あろき翅のおしろゐや
黄にこそよほへ新（にひ）ごろも
みやびは誰か及ぶべき
花を臥戸（ふしと）にふたり寝るとは

水彩風景

杏花一孤村
流水數間屋
夕陽不見人
牯牛麥中宿

紀映淮

杏咲くさびしき田舎
川添ひや家おちこち
入日さし人げもなくて
麥畑にねむる牛あり

行く春の川べゝ別れ

一片潮聲下石頭
江亭送客使人愁
可愁垂柳糸千尺
不爲春江綰去舟

趙今燕

岩にせかはる川浪や
人に別るるわが歎　長々（ながなが）しくも
徒らに堤のやなぎ糸たれて
去りゆく舟を得つなぎもせず

おなじく

春の江のながれをろばろ
ゆく舟やとどまりもせず
わがこころ水にかも似ぬ
朝ゆうべ君を追ひつつ

森森春江上
孤舟去莫留
思君若流水
日夕伴行舟

趙今燕

行く春

三月春無味
楊花惹曉風
莫行流水岸
片片是殘紅

景翮翮

ほぢきなの春のをはりは
朝かぜにやなぎふびくと
行くなかれ　川べの岸に
ちり果てて花ぞいさよふ

そゞろごゝろ

竹榻清人夢
花香媚酒杯
覺來有幽趣
明月滿欣臺

馬月嬌

夢こそ清けれ竹の寢椅子に
杯あまけれ花のかをりに
目ざめてそぞろに樂しからずや
月かげさやかゝ櫛笥（くしげ）を照らせり

白鷺をうたひて

はまべにひとり白鷺の
ほだに打つ羽音（はねね）もそぞし
高ゆく風をまてるらむ
おころ雲ゐにあこがれて

沙頭一水禽
鼓翼揚清音
只待高風便
非無雲漢心

張文姫

池のほとりなる竹

池にのぞめるくれ竹や
枝は水の面（みも）にしだれつつ
みどりは日日（ひひ）に池水の
波にそそぎてつきをせず

此君臨此池
枝低水相近
碧色緑波中
日日流不盡

張文姫

川ぞひの欄によりて

近水人家小結廬
軒窗瀟灑勝幽居
凭欄忽聞漁楫響
知有小船來賣魚

鄭允端

川ぞひの小家のかまへ
窗ゆかしよき庵よりも
立ちゝれば櫓の音ひびき
小船來て魚を買へとぞ

夏の日の戀人

ほれづれの夏の日ねもす
うたたねの枕そずしや
かよへかし夢はかたみに
君來ます夜(よる)をまちがて

日永倦遊賞
枕簟集涼颸
便欲甘同夢
那堪日落遲

李瑣

水かゞみ

浮ぐもの鬢（びん）　月の眉
水草さけてゐんざしの
落ちたはあたり澄みわたる
水を鏡になほすおくれ毛

輕鬢覺浮雲
雙蛾初擬月
水澄正落釵
萍開理垂髪

沈滿願

乳房をうたひて

湯あがりを
うれしき人になぶられて
露にじむ時
むらさきの葡萄の玉ぞ

浴罷檀郎捫弄處
露華涼沁紫葡萄
趙鸞鸞

戀愛天文學

われは北斗の星にして
千年(とせ)ゆるがぬものなほを
君がこゝろの天つ日や
あしたはひがし暮は西

儂作北斗星
千年無轉移
歡行白日心
朝東暮還西

子夜

朝の別れ

思ひつめては見えもする
君ゆきがてのうしろかげ
おぼろめきつつ蓮（はちす）さへ
花も見わかぬ朝ぎりに

我念歡的的
子行猶豫情
霧露隠芙蓉
見蓮不分明

子夜

採蓮

風日正晴明
荷花蔽州渚
不見採蓮人
只聞花下語

端淑卿

きわやかに風や日かげや
花はちす汀(みぎは)をつつみ
見えもせで蓮(はちす)採(と)る子や
花がくれかたらふ聲す

はつ秋

白蓮（びゃくれん）さきて風は秋
袖ざめ切なく見かへれば
雲あしはやき夕ぞらの
夜半や片しく袖に降るらん

白藕成花風已秋
不堪殘睡更回頭
晚雲帶雨歸飛急
去作西窗一枕愁
王氏女

秋の鏡

憶昨花前別
秦淮水又秋
朝來怯臨鏡
孤影空自愁

趙今燕

別れしは昨（きそ）、花さく日
ゐま秦淮の水は秋
朝（あした）うたてきかがみには
わが面かげぞいたましき

秋の江

不喜秦淮水
生憎江上船
載兒夫婿去
經歲又經年

劉采春

うたてしや秦淮の水
おぞましや江に浮ぶ船
わが夫(せ)をのせて去(い)にしより
流れけむ　年を幾年(いくとせ)

手巾を贈るにそへて

愁聽玉漏夜偏長
薄命如儂固自當
一縷機絲柳寄恨
莫教拋擲阿誰傍

陳眞素

うれひぞ長く更くる夜に
身をはそうらみ一すぢに
織りてまゐらせものぞ悲しも
誰(た)がよき閨に人や捨つらむ

月は空しく鏡に似たり

醉罷月已明
照我還照君
如何君不見
只見天邊雲

周文

醉ひざめの月のさやけきよ
君をも照らすものからに
君がすがたは見えもせで
ゐだわりなさの天つ雲見ゆ

秋の別れ

別路雲初起
離亭葉正飛
所嗟人異雁
不得一行飛

七歳女子

別れ路に雲湧きうかび
葉は散るよ峠の茶屋に
あなし、人、雁（かり）にあらねば
一つらに飛ばんすべなし

秋ふかくして

わかきなやみに得も堪へで
わがふかなうに頼むかな
今はた秋もふけまさる
夜ごとの閨（ねや）に白みゆく髪

自歎多情是足愁
況當風月滿庭秋
洞房偏與更聲近
夜夜燈前欲白頭

魚玄機

戀するものゝ涙

幾點愁人涙
不許秋風吹
吹到長江裏
江流無盡期

景翩翩

戀するものゝ涙を
ふ吹きはらひそ秋風
吹きて河べにいたらば
ながれは盡きせじ

もみぢ葉

日はくれ風ふき
枝に葉は落つ
をゆる思ひは
君に知られず

日暮風吹
落葉依枝
寸心丹意
愁君未知

青溪小姑

思ひあふれて

誰能思不歌
誰能飢不食
日冥當戸倚
惆悵底不憶

子夜

思ひあふれて歌はざらめや
饑をおぼえて食はざらめや
ゐそがれひとり戸に倚り立ちて
切なく君をおもたはざらめや

秋の瀧

冷色初澄一帶烟
幽聲遙瀉十絲絃
長來枕上牽情思
不使愁人半夜眠

薛濤

きわやかに目路澄むあたり
音に見えしかそけき琴は
かよひ來て夜半のまくらに
寢ぃもさせず人戀ふる子を

ともし灯の教へ

夜牛燈花落
液涙滿銅荷
乃知消息理
榮華憂患多

李　筠

ながき夜の灯に結ぶ丁字の
燭涙となりたまるを見れば
今はた知りぬ世のことわりを
時めける人うれひまげしと

殘燈を咏みて

殘燈猶未滅
將盡更揚輝
唯餘一兩焰
纔得解羅衣

沈滿願

やもし灯の
消(け)ねがに見えて
ふかなふに
帯解く間(ひま)は燃えまさるつゝ

つれなき人に

風は勿(な)ほしそうす衣の
なみだに沾(ひ)ぢし袖たもと
西する雁(かり)にことづてて
ほれなき人に看せはしを

涙濕香羅袖
臨風不肯乾
欲憑西去雁
寄與薄情看

丁渥妻

旅びと

草まくら月は飽かなく
立ちつくし濡るる夜露よ
きまよひて衣手さむく
己(し)が影は見つつかなしを

客中頻見月
貪立露華冷
徘徊斂衣袂
愁人畏見影

李　筠

貧しき女の咏める

夜久織未休
憂々鳴寒機
機中一疋練
終作阿誰衣

愈汝舟妻

寢もやらで長き夜ごろを
梭（をさ）の音のひびきもさむき
さの機のこのねり絹は
織りあげて誰が着るぞも

夜半の思ひ

夜靜還未眠
蛩吟遽難歇
無那一片心
說向雲間月

景翩翩

ゑづけさを寢もいね難く
蟲だにもやめぬ歌あり
ゐかでかは思ひなからむ
語るなり　雲間の月に

骰子を咏みて身を寓するに似たり

一片微寒骨
翻成面面心
自從遭點汚
拋擲到如今

金陵妓

枯れさらばうた骨の屑
おれがみなさまの御心配
汚點（しみ）をつけられ申してより
わうり投げられてまづ斯様（かやう）

松か柏か

やこでどうして來やつたか
凛々しい主（ぬし）がうれひ顔
三度よぶのに知らぬふり
松か柏かきのつよい

歡從何處來
端然有憂色
三啼不一應
有何比松柏

子夜

人に寄す

人目も草も枯れはてて
高殿さむきおばしまの
月にひとりは立ちつくし
歎きわななくものと知れ

萬木凋落苦
樓高濁任欄
綉幃良夜永
誰念怯孤寒

媼婉

月をうかべたる波を見て

寒湖浮夜月
清淺幾廻波
莫道無情水
情入當奈何

王　微

冬の湖（うみ）月をうかべて
きざらなり寄せてよる波
心なの水とは言はじ
人戀ふるこころさながら

霜下の草

年少當及時
蹉跎日就老
若不信儂語
但看霜下草

子夜

若き命は束の間の
ちろめき行くや老來（おいらく）へ
をが言の葉をうたがはば
霜に敷かるゝ草は看よ

ひたぶるに耳傾けよ。
空みつ大和言葉に
こもらへる箜篌（くご）の音（と）ぞある。

芥川龍之介

原作者の事その他

Mais où sont les neiges d'antan?

— François Villon

杜秋娘

西暦七世紀初頭。唐。もと金陵の娼家の女、年十五の時、大官李錡の妾となつた。常に好んで金縷曲――青春を惜しむ歌を唱へて愛人に酒盞を酌(すす)めた。ここに譯出したものが今に傳はつてゐるが、「莫惜」「須惜」「堪折」「須折」「空折」などの疊韻のなかに豪宕な響があるといふのが定評である。李錡が後に亂を起して滅びた後、彼女は召されて宮廷に入り憲宗のために寵せられた。その薨去の後、帝の第三子穆宗が卽位し、彼女を皇子の傅姆に命じた。その養育した皇子は壯年になつて漳王に封ぜられたが、漳王が姦人のために謀られ罪を得て廢削せられるに及んで彼女は暇を賜うて故鄕に歸つた。偶〻杜牧が金陵の地に來てこの

數奇にも不遇な生涯の終りにある彼女を見て憫(あは)れむのあまり杜秋娘詩を賦したが、それは樊川集第一卷に見られる七十八七十八

薛濤

六世紀末。唐の名妓である。もと長安の良家の女として生る。八九歳のころから音律を解したが或る日、その父が井戸のそばの梧(あおぎり)を指ざして、庭除一古桐、聳幹入雲中と歌ふと、この女兒は直ぐに枝迎南北鳥、葉送往來風と續けたので、父はこの兒の前途を歎じたと傳へられてゐる。蓋し、殆んど同時代の女子で詩を能くした李冶が六歳の時父に抱かれて庭の薔薇を咏じ經時未架却、心緒亂縱横と言つたのを父が聞いて、この子後には必ず身持の惡い女になるだらうと悲しんだが果してその通りであつたといふ逸話とともに、一種の詩的說話である。役人であ

つた父は蜀の任地で客死し、母は孀（やもめ）になつてこの娘を育てた。長じて詩を能くするのと眉目の秀でてゐるのとで蜀の地方長官の官邸に召されて、長官が十一人も代る間も、詩をもつて愛せられて諸名家の詩宴に列した。七十五歳の高齢で世を去るまでには、元稹、白居易、杜牧、劉禹錫、其他諸家とも酬和したといふことである。世に薛濤牋と名づけて深紅で小彩のある牋は、彼女が吟咏を名士に酬獻した時に自ら工夫して用ゐたものである。薛濤詩一卷が世に傳はつてゐる。今古奇觀には薛濤の靈と一少年秀才との情事を寫した一篇があつて有名である。それは小泉八雲も譯してゐる。

朱淑眞

十一世紀初頭。宋朝。海寧の人である。幼少の時に兩親を失ひ充分に夫を擇ぶこともし得なかつた。市井の民家に嫁して無知凡庸な夫を有つたことを常に歎き、吟咏によつて胸中の憂悶を洩した。その詩詞集は斷腸集と呼ばれ、前集十一卷後集七卷がある。その中には胸中の不平抑へがたいものが屢々現はれ風雅と稱するには激越にすぎたものも見える。詩藁も沒後夫の父母によつて焚かれたものの一部分が遺(のこ)つたのを、好事者(かうずしや)が顏色如花命如秋葉その薄命を憐れむの餘りにこれを編んだものだと傳へてゐる。彼女は朱文公の姪だといふ說もあるけれども、朱子は新安の入で海寧に兄弟が居たといふことは聞かないがら、多分後人が彼女を飾るための僞說だらうと言はれる。とにかく生涯はあまり明

かではないらしい。ハイネの小曲に、「胸中の戀情は夜鶯の聲となる」といふ意を咏じたものがあつたと思ふが、ここに掲げた絶句は正に同工異曲である。

孟珠

三世紀前半。ただ魏の丹陽の人とのみで未詳である、陽春歌三章が今傳はつてゐる。譯出したものはその第二章である。皐月まつ花たちばなに昔の人の袖の香を聞くに比べて、香花を愛人の氣息と思ふのは大膽で露骨で濃密な詩境である。彼我の詩情の相違を見るべきであらう。西歐の詩には孟珠のものと同想があるだらうと思ふ。この作者の他の二章をも併せ掲げて參考とする。陽春二三月、草與水同色、道逢游冶

郎、恨不早相識」望觀四五年、實情將懊惱、願得無人處、回身與郎抱。」蕩思放縱ではあるが詩美は十分に保たれてゐると思ふ。

夷陵女子　唐朝。未詳。

黄氏女　十三世紀中葉。宋朝の理宗の時代。閩人（びんじん）の潘用中といふ人が父に随うて都に居住してゐた。この青年は笛を弄ぶことを愛したが、隣人黄氏の女は、潘の笛を聞いてその人を慕ひ、潘は彼女を見て帕に詩を題して胡桃をつつんで投げた。彼女も亦、同じく胡桃をつつんだ帕に題した返事の詩がここに譯出したものである。彼等は遂ににこの縁によ

つてむつまじい夫妻となり、帕中の詩は佳話として世間に擴まり、宮廷にまで傳はつて、理宗をして奇遇だと嗟嘆せしめた。

子夜

三四世紀。晉曲で有名な子夜歌の原曲である。子夜は歌曲の名であつて作者の名ではない、といふもあるけれども、今はこの曲の作者たる晉の女子の名だといふに從ふ。傳は無論、未詳である。子夜歌の今に傳はるものは四十二章あるが、玉石相半してゐる。佳なるものはその體の簡古、情緒の切實、眞に秀絶で不朽の歌と稱していい。宜(む)べなる哉(かな)、李白なども之に學ぶところがあつた。後入はこの體に倣(なら)つて、子夜四時歌、大子夜歌、子夜警歌、子夜變歌等の體を作つた。

呂楚卿　明朝の妓女。萬曆のころであらうか。未詳。

景翩翩　十六世紀中葉。明朝。建昌の妓女。字は三昧。四川のひと。閩人（びんじん）といふのは誤であるらしい。後嫁して丁長發の妻となつたが、丁は人の爲めに誣（し）ひられて官に訴へられた時、景は竟（つひ）に自ら縊（くび）れた。その集を散花吟と名づけたといふのが、讖（しん）をなしたかとも思へて悼（いた）ましい。才調の看るべきものがあると思ふ。

賈蓬萊　宋朝、未詳。

紀映淮　明朝。年代は明かでない。字は阿男。金陵の人である。莒州の杜氏に嫁し、早く寡となつたが節を守つて生涯を終つたといふ。漁洋詩話にはその秦淮柳技を推し「洒鴉流水點秋光」を佳句と稱してゐる。

趙今燕　十六世紀中葉。明朝萬曆年間。名は彩姬。呉の人。秦淮の名妓である。才色ともに一代に聞えてゐた。日ごろ風塵の感を抱いて妄（みだり）に笑を賣ることを好まず、書を讀むことを喜び、青樓集を著したといふ。

馬月嬌　趙今燕と同じ時代、同じく秦淮に、同じやうに名を馳せた名妓である。名を守貞といふ。容貌は大して美しいといふ程ではなかつたが、風流でまた豪俠の氣質の敬慕すべきものがあつた。又、湘蘭と號

して善く蘭を畫き一家の風格を得た。その名は海外まで聞え當時シヤムの使節が來朝した時にその畫扇を得て歸つたといふ。

張文姫　九世紀末。唐朝の貴婦人。鮑參軍の妻である。

鄭允端　十二三世紀。呉中の施伯人の妻である。その著を肅雝集といふ。今は傳はらない。

李瑣　明朝の妓女。未詳。

沈滿願　西暦六世紀。梁の貴婦人。氾靖（一に靜に作る）の妻。著すところ甚だ富み、詩に長ずと言はれてゐる。唐書藝文志に憑（よ）くれば滿願集三卷があるといふが、煙滅に歸した。

趙鸞鸞　唐の妓。未詳。その作の傳はるものは五首卽ち、雲鬟、柳眉、檀口、酥乳、纖指の五題いづれも肉體の美を咏じたものである。もとより閨房の戯咏ではあるが、その纖細な美は同じ唐の妓女史鳳の七首などとは比ぶべきではない。譯出したものは酥乳の轉結である。その起承は「粉香汗濕瑤琴軫、春逗酥融白鳳膏」であるが、文字の美を去つてその惹を傳へても無意味に近いからこの二句の譯は企てなかつた。

端淑卿　十六世紀（？）。明朝。當塗の人。教諭端廷弼の女である。幼時から學を好み才媛の名が高かつた。

王氏女

明朝。乗詳。年ごろになつて良縁がなかつた。その悲しみを歌つたこの詩を見て、趙徳麟といふ人が彼女を娶(めと)つた。世人は二十八字媒と呼んで佳話とした。轉句の「晩雲」を一本では「曉雲」に作つてゐる。しかし晩雲でなければ詩情に乏しいかと思ふ。南方の支那では一般に夏時は午睡をする習慣があることを思へば、殘睡に回頭して晩雲を見ても不自然ではないわけである。

劉采春

九世紀初頭。唐朝、元和年間、薛濤や、杜秋娘などと同時代。越の妓女である。その囉嗊曲―望夫の歌は古來喧傳されてゐるものである。

陳眞素　明朝の妓女。未詳。

周　文　同上。

七歳女子　七世紀末。唐朝。この幼女が詩を善くすることが宮廷にまで聞え、則天武后が召して「送兄」といふ題を與へそれによつて作らせたのがこれである。

青溪小姑　五世紀。宋の秣陵尉蔣子文の第三妹である。青溪はその居住の地名で小姑といふのは學藝ある貴婦人に對する敬稱である。簡素な文字のなかに情感の溢れてゐるのを見る可きである。

魚玄機

九世紀。唐朝。薛濤などのすぐ次の時代である。彼女の生涯に到つては最も浪漫的であまりに惨然たるものがある。長安の狹斜の地で生れた彼女が、十五歳の時、題を得て卽座に賦した江邊柳といふ五言律詩は溫庭筠をして好しと言はしめた。十八歳の時、人の妾となつたが情を解しなかつたので、彼女は送られて道觀の女道士となつた。しかし彼女が一度情を解するや、二の女道士は妓女のやうな日夕を送つた。遂にその婢が彼女の愛人と通じたのではないかといふ猜疑に驅られてこれを責めてゐるうちに誤つて婢を死に致した。彼女は刑によつて斬せられ、その多情多恨の生涯は二十六歳で終つた。唐女郎魚玄機詩一卷が傳はつて世に行はれてゐる。森鷗外に「魚玄機」といふ作があつて、創作

といふよりも彼女の評傳と見得るものである。詳しくは就て看らる可きである。その生涯を知つて「自歎多情是足愁」の詩を見ると一層感が深い。青春の憂悶の堪へ難いのを歎いて、身の寧ろ白髪たらむことを願つたこの詩と殆んど同想同句が、現代英國の狂詩入アアサア、シモンズにあるのも亦一奇である。

李　筠

明朝の妓女。未評。

丁渥妻

十二世紀頃（？）。宋朝。その夫が游學して久しく家鄉から遠ざかつてゐた。一夜夢にその妻が燈下で消息を認めてゐるところを見たが、文中にこの詩があつた。後日妻から鄉信を得て見ると果してか

つて夢に見た詩が記されてあつた。譯出したのはその不思議な話の主題となるものである。

兪汝舟妻　朝鮮の女子であるといふ。未詳。

媼婉　宋朝の妓女。未詳。

王微　十六世紀（？）。明朝。宇は修微、揚州の妓女である。二度も士人の妻となつたが何れも完（まつた）うしなかつた。禪に歸依して草衣道人と號した。集があつて期山草樾舘詩集といふ。

目次

序文　奥野信太郎　九
ただ若き日を惜め　杜秋娘　二十五
春ぞなかなかに悲しき　朱淑眞　二十六
音に啼く鳥　薛濤　二十七
春のをとめ　薛濤　二十八
薔薇をつめば　孟珠　二十九
謠　夷陵女子　三十

よき人が笛の音きこゆ　黄氏女　三十一
女ごゝろ　子夜　三十二
ほほ笑みてひとり口すさめる　呂楚卿　三十三
むつごと　子夜　三十四
怨ごと　景翩翩　三十五
蝶を咏める　賈蓬萊　三十六
水彩風景　紀映淮　三十七
行く春の川べゝ別れ　趙今燕　三十八
おなじく　趙今燕　三十九
行く春　景翩翩　四十

そゞろごゝろ　馬月嬌　四十一
白鷺をうたひて　張文姫　四十二
池のほとりなる竹　張文姫　四十三
川ぞひの欄によりて　鄭允端　四十四
夏の日の戀人　李瑣　四十五
水かゞみ　沈滿願　四十六
乳房をうたひて　趙鸞鸞　四十七
戀愛天文學　子夜　四十八
朝の別れ　子夜　四十九
採蓮　端淑卿　五十

はつ秋　王氏女　五十一
秋の鏡　趙今燕　五十二
秋の江　劉采春　五十三
手巾を贈るにそへて　陳眞素　五十四
月は空しく鏡に似たり　周　文　五十五
秋の別れ　七歳女子　五十六
秋ふかくして　魚玄機　五十七
戀するものゝ涙　景翩翩　五十八
もみぢ葉　青溪小姑　五十九
思ひあふれて　子　夜　六十

秋の瀧　薛濤　六十一
ともし灯の教へ　李筠　六十二
殘燈を咏みて　沈滿願　六十三
つれなき人に　丁渥妻　六十四
旅びと　李筠　六十五
貧しき女の咏める　愈汝舟妻　六十六
夜半の思ひ　景翩翩　六十七
骰子を咏みて身を寓するに似たり　金陵妓　六十八
松か柏か　子夜　六十九
人に寄す　媼婉　七十

月をうかべたる波を見て　王　微　七十一
霜下の草　子　夜　七十二
原作者の事その他　七十五

装　釘　小穴隆一